秀賞

チーム

山形県東根市立第一中学校
２年　三上　唯衣

８月２日。季節外れの雨が降った日、私たち女子ハンドボール部の３年生の先輩は引退した。「ありがとうございました！」と３年生を送った時、次は私たちの番なのだと実感した。

そして、私は副部長になった。これまでも人の前に立つ役割は多く経験してきたが、私の短気な性格で、チームの雰囲気が悪くなってしまうのではないかという不安はあった。その一方で、話し合いの中で新チームの目標を必死に考えるみんなのキラキラした表情を見て、１年後、どんなチームになっているのだろうかとワクワクもした。

誰もが楽しみにしていたであろう、新チーム一発目の練習。期待とは裏腹に、最悪の雰囲気に終わった。１年生が全然準備をしない上に、声をほとんど出さないことに、２年生全員が腹を立てたのだ。たったそれだけで、と思われるかもしれない。だが、２年生が声がけをやめた途端「タッタッ」という足音しか聞こえない体育館。そのくせ休憩時間や学年別の練習になると体育館に響きだす、大きな声と笑い声。私たちは我慢できなかったのだ。

考えてみれば、一番の原因は、２年生全員が、声出しも準備も「やって当たり前」と思っていたことだ。私たちが１年生の時、先輩から、準備も声出しも積極的にやるように教えられてきた。２年生が準備していたら「１年生！」と注意されたり、声が小さかったらペナルティを課せられたりした。先輩方が厳しくしてくれたから習慣化できた。自分たちができて当たり前だと思っていることができない１年生を見て腹が立ったのだが、自分たちがしてもらったほど、私たちは後輩に厳しく教えてこなかったのも確かだった。

１年生も、怒られたのが気に食わず、不機嫌だったことが見て取れた。最悪の空気が流れた。でも、私は何もできなかった。

お盆で部活動休止期間に入ってからも、この日のことが忘れられなかった。テレビで甲子園を観戦して盛り上がっていても、「これからどうしよう」という不安が常に頭をよぎっていた。

そんな中、山形県選抜チームの選考会があった。県内の２、３年生のハンドボーラーが集まり、混合で３チームに分かれて試合をする。チームごとに分かれて練習を始めた時、私は同じチームになったある人から目が離せなくなった。その人は、地区総体、県総体で戦ったライバルチームの主将だった。特別目立

つわけではない。大量に得点を得るわけでもない。ただ、私にはないものを持っていた。「人を引っ張る才能」だ。どんな細かいことでもほめてくれて、感謝の言葉を忘れない。試合では「今のナイスパス」「ナイスフォロー」と、毎回ハイタッチしてくれる。ミスが続いたら「切り替えていこう」と声をかける。彼女がいるだけで、チーム全体の士気と一体感が上がっているのをひしひしと感じた。それは、彼女の、どんな時でも会話を大事にする姿勢と、細かいことも見逃さない観察眼が生み出すものだった。「今の助かった！　次なんだけどさ、……。」と、相手をたたえ、そこから意見交換を求める。私がビブスを用意していることに彼女だけが気づいて「ありがとう」と笑顔で言ってくれる。彼女は、私の悩みに対する答えを示してくれたような気がした。

あの日、私やみんなに足りなかったのは思いやりだった。相手の思いを考え、自分ならどうされたら嬉しいかを考える。そんなチームになれたなら、きっと勝つための強さも、プレーする楽しさも手に入れられるはずだ。私はまたワクワクしてきた。

そして迎えた部活動。まずは私が「思いやり」を大事にしよう。そう心に決めて、１年生と積極的にコミュニケーションを取ったり、注意しなくてはいけない場面でも口調に気をつけ、言葉を選んで話したりしてみた。するとそれは周りの２年生にも広がり、チーム全体が明るくなった気がした。あの日見られなかった笑顔がコートにあふれ、楽しい練習ができたのだった。

私は、彼女のようなリーダーにはなれないと思う。でも私にはチームメイトがいる。私一人ではできなくても、みんなで最高の「チーム」を作ればいいのだ。試合に出る人、出ない人、１年生、２年生関係なく、みんながみんなを支え合えるチームを。お互いを思いやり、温かい言葉をかけ合う気持ちを忘れなければ、きっとそんなチームにできるはずだ。そしてそんな温かい絆で結ばれたチームこそが、本当に強いチームなのだと思う。

もうすぐ県選抜の大会、そして新人戦。部活動にも一段と熱が入る。さあ、明日はどんな練習だろう。どんなメニューでも、温かく思いやりにあふれた練習にしよう。